

犬のけいれん発作に対する大麻草由来 「カンナビジオール（CBD）」の有用性

遠藤麻里¹⁾、伊地知優子²⁾、菅野晶子³⁾

Mari ENDO¹⁾, Yuko IJICHI²⁾, Akiko KANNO³⁾

1) マリーペットクリニック 2) フェアリーペットケアクリニック 3) アキホリスティック動物病院

1) Marie Pet Clinic 2) Fairy Pet Care Clinic 3) Aki Holistic Veterinary Care

大麻草に含まれるカンナビジオール（CBD）には、臨床上注目し得る作用のある事は広く知られているが、日本では様々な品種の大麻草の全般に対し、その「葉」と「花穂」および「根」の利用が法律で禁止されている。本検討では、日本の現行法で産業利用が認められている大麻草部位「種子および成熟した茎」から、抽出されたCBDを用いて製造された製品（加工食品）を用いた。

人に対するCBDの効果は、中枢神経を含む神経細胞上に存在する複数の受容体に結合することにより発現すると考えられているが、その感受性は個人差が大きい。

そこで今回、コンパニオンアニマルの犬に対し、飼主からCBD含有食品を与えてもらい、その反応を検証した。

一般的に、イヌはヒトよりも体の代謝全般が活発であり、そのためサプリメント類に関する反応性はヒトよりも顕著に現れる傾向があると考えられる。また、体重当たりのドーズの面からも有利なことが多い。

検討症例の選択

大麻草には代表的な2成分「CBD（カンナビジオール）」および「THC（テトラヒドロカンナビノール）」が含まれているが、「THC」と拮抗する作用

を持つ「CBD」には、神経の昂りや異常興奮を鎮める効果が期待できる。

今回、けいれん発作や神経症状を示す個体を選択しその効果を検討した。

結果

今回、11頭の犬にCBD含有食品を与えた結果、全頭ともけいれん発作等神経症状に対する改善効果がみられた。

考察

医療における植物由来ファイトケミカルの利用は、今後の予防医療における重要な一項目になると考えられ、候補といえる植物素材は多数存在している。

本検討で取上げた大麻草由来CBDは、脊椎動物に普遍的に存在する神経ネットワーク（エンド・カンナビノイド・システム）上の受容体に直接働きかけ、結果、内因性リガンドの生成を惹起する特徴的な作用を持っており、余多あるファイトケミカルの中でも特に注目し得る素材と考えられる。

今回、イヌを使った症例でその検証を試みCBDの有用性を確認することができた。今後の医療界において広く利用が可能なファイトケミカルの1つといえる。